

切開された同時代史の断面

長尾龍一著

『アメリカ知識人と極東——ラティモアとその時代——』

中嶋嶺雄
(東京外国语大学教授)

四年(1984)

「中國は今日の世界でもつとも重要な國々の一つであるが、おそらく次の百年間ではいろいろな面でその中でもつとも重要な國となるであろう。……中國がうまくいけばアジアがうまくいくし、中國がうまくいかなければアジアがうまくいかないからである。」
(オーウェン・ラティモア『中国——その小史』、一九四七年邦訳、平野義太郎監修・小川修訳、岩波新書、一九五〇年)

「アジアは手にあるものとなつた。スエズから西太平洋まで、あちらの國、こちらの國に次から次へと起りつつある問題にわれわれは直面しているのだが、それらの問題は、アメリカ自身の決断によつても、またアメリカが自己的の味方と考へてゐる國々との協働によつても、解決するとのできないものである。」(オーウェン・ラティモア『アジアの情勢』、一九四九年邦訳、小川修訳、河出文庫、一九五五)

右の引用は、第二次大戦後のわが国で広く読まれたオーウェン・ラティモアの二つの著書の冒頭部分であるが、ここに示された中国・アジア認識こそ、戦後日本の知識人をとらえた一つの世界観であったといえよう。一九五〇年代のわが国のジャーナリズムは、このような世界観を絶対的な基調として多くの知識人に発言させてきたといつても誤りではない。私自身、みずからが中国研究の道を志すこととなつた背景にも、ラティモアがここに描いたような『新生中国と進んだアジア』への強い共感があつたような気がする。

だが、そのラティモアは、強い影響力をもつた東アジア研究者として同時代史を内側から形成する役割を担つばかりでなく、アメリカにおいて日本軍国主義と天皇制をもつとも激しく告発し、戦後日本の形成にもつとも厳しい態度で臨もうとした政策形成者でもあ

るうとした人物である。

本書は、このような二つの顔をもつて第二次大戦前後の時期に大きな役割を演じ、その結果、五〇年代前半のアメリカを席巻したマッカーシズムの風のただなかに立つたラティモアの思想と行動の軌跡をたどることによって、戦後世界史の一つの断面に照明を与えるとしたものである。

もつとも著者は、その柔軟な思考で注目される中堅の法哲学者であつて、中国・アジア問題の専門家でも、占領史研究家でもない立場から本書を著している。つまり、一九八二年八月から一年七ヵ月の米国滞在中に米対日政策の中心人物となつたグルーとマッカーサーについて調べて、さらに、「グルー・マッカーサーの対日政策の左からの批判者たちの『黒幕』である」ラティモアに興味をいただき、こうして専門研究の副産物としての本書が生まれたのである。

しかし、本書は、そのような余業とはいえないだけの骨格と実証的な記述によって、ラティモアを中心とする当時のアメリカの知識人・政策形成者のアジア認識の陰影を浮き彫りにしており、また、アメリカ国務省内部の「中国派」と「日本派」との角逐を照射して、やがてマッカーシズムへと収斂してゆくプロセスを丹念にとらえている。

本書は全体が四部構成になつており、まず

第一部「眞珠湾まで」は、ラティモアの中国との出会いから筆を起し、太平洋問題調査会誌として知られる『アメレジア』の解剖、そして蒋介石顧問としてのラティモアを描いている。『中国の赤い星』で知られるエドガー・スノーの延安訪問直後の一九三七年春、延安を訪れて毛沢東、周恩来、朱徳らと会見したラティモアが、その後のガンサー・スタイン（『延安——一九四四年』の著者）やセオドア・ホワイト（『歴史の探究』の著者）らのジャーナリストやバレット大佐らの有名なディキシー・ミッショーン一行、それにラティモアのあとに蔣介石顧問ジョセフ・スタイルルウェル将軍の影響下にあった米国務省“延安派”的面々とちがって、当時の中国共産党にたいしかなり慎重な見方をしていたこと、一方、蔣介石にたいしては、ラティモアの反日感情の強さのためもあってかなり評価が高かつたことなどが淡淡と語られている。

第二部「対日戦争」は、戦時情報局(OWI)時代のラティモアをとらえ、「天皇制温存政策」に激しく反対していたラティモアらの「中国派」と「戦時における天皇制のタブー化」、戦後における天皇制の利用という政策」を推進したグループ「日本派」との根深い対立を描き、それは「国務省や極東専門家の梓をこえて、米国政府指導部の全体を巻き込む巨大な対立へと発展していった」と著者はいふ。

ここでは蔵介石とステーブルウェルの有名な対立に加えて、米副大統領ヘンリー・ウォレスの訪中前後の時期の記述が鮮やかである。重慶政権へのアメリカの評価が一九四三年前半まではきわめて高かったこと、とくに宋美齡女史の米議会演説にたいして全米が興奮して称賛した点などは、從来、看過されてきた史実であろう。スタイルウエル・グループと対立した援蒋派のバトリック・ハーレー大使をめぐるエピソードや延安の日本人民解放連盟の岡野進（野坂参三）らが、「アメリカ

『グループ』に拠る当時のアメリカ知識人にいかに大きな期待を寄せられていたかがアンドリー・ロスの論文などによって描かれており、ハル・マツイ（石垣綾子）女史の当時の過激な立場も印象深い。

第三部「対日終戦」は、ラティモアの新著『アジアにおける解決』を手がかりにハーバート・ノーマンの日本分析に依拠したラティモアの日本社会論が語られ、グルー新国務次官の就任とともに「中国派」が退潮し、やがてディーン・アチソンがグルーの後任となつて再び「中国派」が優勢となる米国務省内部が描かれている。こうした状況のなかで対日占領の最高責任者となつたマッカーサーの周辺には、ノーマン、ラティモア、ロスなど、「対日ハーレド・ビース論者」が数多く存在したのだが、やがて中華人民共和国の成立前夜になると状況はアメリカ国内でも大きく変つてゆく。

第四部「魔女狩りの中で」は、こうして「中國喪失」に直面したアメリカがマッカーシズ

わが国のジ
ヤーナリズ
ムの歴史に
おける証人

月曜評論

日本人としての正当な誇りを基礎として、新聞倫理綱領より逸脱していける日本の大新聞を批判し、正論の何たるかを知らしめたい」。

株式会社 月曜評論社 毎週 月曜日発行 半年分 三〇〇〇円
TEL(02)三六四五六振替東京二六三〇三一 一年分 六〇〇〇円

ムに傾いてゆく状況を追跡しており、マッカラン委員会を中心とする「赤狩り」の最大の対象にされたラティモアが追いつめられてゆく様子が再現されている。

著者は最後に日本にたいするマッカーシズムの意味を問いかながら、「今や永遠の青年であつた『戦後派知識人』も老い、また狂信とヴァイン・グローリーの危険を身にしみて感じた保守的支配層も老いた。こうして民族的負責を忘れ、集団的自己欺瞞の失敗の体験もまたない新世代が日本を支配する時代を迎えている。このような時期に、グレーのリアリズムやラティモアの義憲を想起することは、一義的でない様々な教訓となりうると思われる」と結んでいる。

本書全体を流れる著者の禁欲的な立場がここに象徴されており、著者の乾いた筆によつて一つの時代相をわれわれのまえに客観的に提示することに著者は見事に成功しているといえよう。だが同時に、またそれゆえにこそ、ではラティモアの義憲に見られる世界觀を今日の時点でどのように総括すべきかを是非語つてしまひたという気がする。

私自身は、ラティモアに会つたこともあり、長く彼の助手をつとめたモンゴル人学者のオノン・ウルグンゲ氏（リーズ大学）は私の知友でもあり、また本書にしばしば登場する亡きマーク・ゲインとも何度か語り合つたこ

とがあるが、今日の中国の変貌やアジア N.I.C.S.諸国の目覚しい発展を見るにつけ、また、「日本といえどもその将来がどうなるかわかつたものではない」（前掲『アジアの情勢』）と述べて、天皇制打倒による日本革命を期待してさえたラティモアの認識を想うにつけ、ラティモアの歴史觀はやはり一つの時代の產物でしかなかつたといわねばなるまい。それは中國革命の歴史的意味が表んでゆく過程と同じ歩みをたどつたのであつた。

当時の延安に関するその後の証言としては、ソ連側の立場から見たピョートル・ウラジミロフ『延安日記（上・下）』（高橋正訳、サイマル出版会、一九七五年）がある。本書にも登場するジョン・K・フェアバンクは、ラティモアと好対照をなしてアメリカ知識人のアジア認識に影響を与えてきた中国学の碩学であるが、その回想録 John K. Fairbank, *Chinabound: A Fifty-Year Memoir* (Harper & Row, 1982) は是非参照してほしかつた。

（東京大学出版会、1981年）



なお、同じテーマの著作として著者も脱稿後に参照したと語っている小林弘二著『対話と断絶——アメリカ知識人と現代アジア——』（筑摩書房、一九八一年）のほか、毛里和子「オウエン・ラティモア考」（『お茶の水史学』第二十二号、一九七九年四月）や、最近では五百旗頭真『米国の日本占領政策（上・下）』（中央公論社、一九八五年）などがあり、マッカーシズムに関しては、新しく John G. Adams, *Without*